

アカデミック世界のマイノリティ

第23回

# 勇気を持って流れを変えよう

江口ひより えぐち ひより



イラスト=飯箸 薫

私は大学院生の時分から、研究以外のことに悩まされる状況に何度か遭ってきた。いま振り返るとアカハラ(アカデミックハラスメント)を受けていたのではないと思う。自分がどのような経験をし、そのときどう考え、どのように乗り越えて来たか、その一端を記すことによって、似たような思いを抱えている若い同僚に少しでも役に立てればと思いペンをとった。またこの経験をふまえ、女性研究者の研究環境をどうやって良くしていくかという問題についても触れてみたい。

## 指導をしない指導教官

大学院に入学した頃は、研究者になりたいとの純粋な希望を持ち、この目標に向かってまっすぐに努力することに何の問題も感じていなかった。その状況が一変したのは、ささいなことがきっかけだった。修士2年の夏、外国で研究をしていた私と同郷の日本人教授から、大学院の後輩を介して会いたいと言われたことを、修論指導についたばかりの指導教官は、どこからか聞きつけ、激高した。私は、その教授と会うつもりはないし、歓心を得ようとか指導を受けようという気も無いことを説明したが、このときから指導教官の態度は非常に硬直したものとなったように感じられた。

そして博士課程に入ってからは「他の学生の修論の面倒をみななければいけない」「雑誌の記事を

書かなければいけない」「本を書かなければいけない」という理由で、研究指導を受けることができなかった。

はじめは、指導教官の態度がハラスメントに当たるとは全くとって思っていなかった。むしろ、こうした状況になったのは自分に足りないところがあるからで、もっと努力すれば関係は改善されるだろう、とずっと考えていた。しかしそう思いながら1年、2年と自分なりに努力を重ねても状況はいつこうに良くなりならず、さらに悪化していく一方だった。そして、夜眠れないことが続くようになった。

博士課程の2年目も終わりかけていた2月頃、心の異変に気がついた。最初は突発的な自殺衝動だった。すぐにバカなことはやめようと思ひ返し、その衝動は消えたのだが、さらに数日後、他人の成功を喜ばなくなっている自分に気付いた。

自殺衝動は今考えれば危険だったと思うが、その時点では自分がそれほど精神的にまいっているとは気づかなかった。しかし「他人が失敗してしまえばいい」という卑屈な思いが心の底から込み上がってきた時には本当に驚き、性格までおかしくなるくらいなら、違う道を歩んだ方がいいのではないかと、大学院をやめることを真剣に考えた。

思い悩んだが、結局もう少し続けてみることにした。大学院に入って、まだ1本も論文が書けていない。何かひとつ、自分でやったと思えるも





のを創ろう。それで自分がだめだと思ったらそのときは潔くあきらめようと決めた。

### ハラスメントではないかと気づく

しかしそう決めたものの、この苦しい思いを自分のなかだけで抱えているのは限界だった。心理カウンセラーになっていた友人と年上のポストク女性研究者に今までの話を聞いてもらうことにした。「私とその指導教官の立場ならこう思う」という女性研究者の感想がきっかけとなり、私はよく考えてみた。大学の先生は偉いと無意識に刷り込まれていたようだ。ずっと「私が悪い」「私の努力が足りない」と思いこんでいたが、違うのかもしれない。何日もかけてよく考えたが、これはハラスメントであって、問題があるのは基本的に指導教官の側だと考えると、これまでのすべてのことにつじつまが合うように思えた。

後日談になるが、私が学外に出た後に、この元指導教官の教授昇進人事に際し、同じ研究科のある教授から「彼がなぜあれほど若い人に自分が抜かれることを怖がるのか理解できない」と言われた。できれば弱い立場である学生の時に言ってほしかったが、当時はその教授にもわかっていなかったのだ。私が大学院生の頃は、まだセクハラ・アカハラという言葉はそれほど世間に浸透していなかったし、その言葉が意味する状況がどんなものであるかわかっている人はほとんどいなかったと思う。ハラスメントの状況下で「自分に原因がある」と思うのは、被害者が持つ典型的な感情であるということを知ったのは、学外に出て2年ほど経ってからだった。

### 一步踏み出す

ハラスメントではないかと気づいてからは、心に炎が燃えているような状態だった。まず、学内の同じ研究分野の教授に指導教官の状況を話した。しかし、「人間、手を挙げてても足を挙げてても気にくわない人っているでしょう。それが指導教官にとっての君なんだよ」という反応だった。今なら即刻授業料を返せと言い出すところであるが、そ

の頃はそんなことを言い出すことなど思いもよらないし、その元気もない。

博士課程の3年になっていた。学位論文はどうするのか。研究対象を変えるのもひとつの方策だと思ったが、また一から勉強し直すのでは、学位を取るのに時間がかかりすぎてしまう。視点を変えて同じ研究対象を違う研究分野の目から研究するのが良いのではないかと考えた。

私の研究対象には、解決できていない大きな謎といわれている観測現象があった。博士課程3年の6月に過去の文献を読んでいるうち、あるアイデアが浮かび、それを指導教官に話してみた。その時は、指導教官が変わってくれるのではないかと、途中経過はどうであったとしても最後はやはり良い関係になって指導を受けたいという、かすかな望みをまだ持っていた。

しかし返事は「その謎を解くことができれば大ヒットだが、君にそんなことができるはずがない」という期待はずれのものだった。アイデアを活かすためには、指導してくれる先生が必要だった。研究を志す者として自信があったわけでは全くなく、一步踏み出すのは大変怖かった。しかしどう転んでも、これ以上悪い状況にはなり得ない。何より、このままの状況が続いていくことだけは耐えられなかった。勇気を出して、知り合いのつてをたどり、学外のある先生のところへ行きついた。

### 人生の恩師との出会い

その先生は、職場に押しかけてきた私に対して嫌な顔ひとつせず、話を聞いて、一緒に研究することを承知して下さった。大学院で指導教官とうまくいっていないことは、恥ずかしくて言えなかった。先生も何も聞こうとはなさらず、私はその先生の職場に通うことになった。この頃のことを思い出すと、この原稿を書いている今でさえ、感謝の涙があふれ出てきて止まらなくなる。

希望の光が少し見えてきたとはいえ、大学に戻れば相も変わらぬストレスの日々だった。博士課程の3年の秋の学会発表を申し込むことにした。まだ何の結果も出ていなかったが、自分で自分に





課したテーマを、自分が考えたアイデアで解く。絶対に学会までにここまでやる、という制限を自分自身に与えてしまおう。だめならそれで終わり。それができなければ、学位をとるなんて到底無理だと考えた。

学会発表を申し込んだことを伝えると、指導教官は自分から私の指導教官を降りた。もともと指導は受けていなかったもので、実質的に何の違いもなかった。

### 自分の得た結論を信じる

それからは、24時間、寝ても覚めても、研究課題に集中した。そして前述の先生の多大な御指導により、無事に秋の学会発表の演壇に立つことが出来た。

しかしその学会も含め、その後私が研究発表をする度に、元指導教官は毎回その場において、質疑応答の時間に、私の仕事に対する非難のコメントを繰り返すようになった。しかし私は、自分の研究は学問的に正しい路線を行っていると思えなかった。私がなんとかへこたれないでやってこれたのは、自分の研究を信じ続けることができたからという面が大きい。

学外の先生に指導を受けるようになってから、私のアイデアは発展し、半年後には学術雑誌に論文を投稿した。ちょうどその博士課程3年の冬、ある国際研究会が日本で開催されることになった。私はそこで自分の研究を発表することにした。アイデアを思いつききっかけとなった論文の著者である外国の教授がゲストに招かれていたからである。その先生に自分の仕事はどう評価されるのかわかって、研究者として生きていけるのかどうかを確かめたかった。

私の発表を聞き終えた瞬間、その外国人教授は、“YOU PROPOSED NEW MODEL!”とおっしゃった。だが予想どおり、座長を務めていた元指導教官が私の仕事を非難しはじめた。攻防は質疑応答時間で終わらず昼食休憩にまで食い込み、私たちはその場に就いて議論を続けた。一緒に残っていたその外国人教授は、静かに議論を聞き、元指導教官に向かって言った。“DON'T KEEP

WRONG CONCEPT!”その瞬間、生き残った！という思いが、身体の底から沸き上がってきた。そして教授は私の方へ向き直り「大変に面白い仕事だ、ぜひプレプリントを送ってくれ」とおっしゃった。孤立無援と感じていた学生にとって、これ以上の励ましはなかった。

### 学位の取得、そしてハラスメントの終焉

さらに数カ月が過ぎた。雑誌に掲載が受理された論文が2本と、単著で執筆中の論文もあったので、学内の博士号の授位の基準は十分に満たしていた。しかし、元指導教官の反対で学位審査が通る見通しはたまたず、結局その大学で学位をとることはあきらめざるを得なかった。

しかし幸いなことに、外部のポスドク相当ポジションの試験に合格し、研究機関を移ることになった。そこでは落ち着いて自分の研究に集中でき、2度目の学位論文をまとめて、3年がかりで他大学で学位を取った。(審査に携わって下さった5人の先生方、特に主査を引き受け励まして下さった先生には、本当に、心から感謝している。)

学位の取得と時期を同じくして、元指導教官は私の発表を聞いても何も言わなくなった。私の仕事が、論文にうまくまとまってきたせいもあるだろうし、彼が一言一語聴衆の前で十言返せるくらいの自信と気迫を私が持つようになったこともあるだろう。ここに至ってようやく私はハラスメントに勝てたのかな、と思えた。

### ハラスメントに遭ったときの行動方針

以上が私の体験である。以下では、この経験やその後スタッフとなってからも学んだことで、ハラスメントやその他の困難に遭った時に参考になるかもしれないと思われることを述べる。

ハラスメントは、その内容、被害者の心身の傷、被害者・加害者の立場と性格、さらには周囲の状況によって対処のしかたが変わってくると思う。だから私のやり方が、他のケースにもよいかどうかはわからない。私の場合は、とにかく学位をとること、それまではそれに集中することが、自分





で選んだ行動方針だった。

シリアスなハラスメントに遭った時、私が一番大事だと思うのは、「自分を好きであり続けられるようにすること」である。これを突き詰めて考えれば、自分はどうしたいのか、どうすればよいのか、という方針が見つかるのではないだろうか。

「自分が悪いからこんな目に遭うのだ」と思うのは、ハラスメント被害者の典型的感情である。それを知った上で、まずは本当に自分に改善できることはないのか、率直に考えてみよう。自分で問題を解決しようと努力することは、決して無駄にはならない。そして自分だけで答えが見つからなければ、一人で抱えこまず、本当に信頼できる相手を探して話してみてもどうだろうか。ハラスメントは解決に至るまでに長い時間を要する場合も多い。貴重な時間を失って後悔しないためにも、行動方針を決めた後も、大切なことは何なのか、常に自分に問いかけていよう。

研究室でのハラスメントは、たいてい第三者がいない密室で行われる。危ないと思ったら、加害者と一対一になるのを避け、どうしてもそうなる場合には、記録を残すようにしたい。ICレコーダーを忍ばせておくという手もあるだろう。渦中にいるときはなかなか難しいが、起きた事や自分の気持ちをきちんと記録しておくことは大切だ。

研究室内で起きていたハラスメントを見て見ぬふりをしたり、問題を隠蔽したりする人は、被害者にとっては加害者も同然である。また当事者以外の者が便乗して被害者を余計に傷つければ、明確な二次加害であることもきちんと認識しておくべきだと思う。

ただ、被害者も気を付けておかなければならないのは、被害者意識が高じてネガティブスパイラルに陥らないようにすることだ。被害に遭ったことで自分のことしか見えなくなってしまう、自分の身に起こる事柄すべてを悪い方に悪い方に思いこんだり、自分は正しく悪いのはすべて他人や環境のせいだという思いに過度に捕らわれて、自分中心の論理をどんどん展開していつてしまうことがある。傷ついた心がそうさせてしまうのだが、長期にわたって被害者意識に凝り固まって、自分だけの論理を展開していると、それまで同情し協

力してくれた周囲の人々の気持ちまで離れていつてしまう。意識して自分をきちんとコントロールするか、忠告してくれる人を持ちたい。

### 自分を叱咤激励する自分なりのやり方を持つ

恩師の指導を受け半年が経ったころ、大学院で指導教官とうまくいっていないことを告げた。きつと当惑なさるに違いない、やっかい事を持ち込んで申し訳ない、と思いながらだったが、先生は、「一流の仕事をしていれば、必ず反対する人が現れるものです。それが、近くにいるか、遠くにいるかだけの違いなのです。シュレディンガー然り、アーベル然りでしょうか?」と、笑っておっしゃった。その先生の穏やかさとその言葉に、心の底から救われた。この恩師の言葉を、いつも心のうちで反芻し、大丈夫、大丈夫、と自分を元気づけてきた。

それからというもの、自分を励ましてくれそうな、気になる言葉に出会うと、書き留めておくようになった。自分を叱咤激励する自分なりのやり方を持つことは、もう一步頑張ろうという時の元気の素になる。

### ストレス耐性を育てよう

期せずして困難に出会ってしまった時、ストレス耐性があるかどうかで受け止め方はまったく違って来る。ストレスをなるべく受けないためには、まず規則正しい生活を送ること、そして、落語や喜劇でも何でもよい、頭を悩ませていることとは何か別のことで笑うとよいと思う。また心と身体は強くリンクしているので、心がダメージを受けていると自覚したら、心だけでなく、身体のメンテナンスにも気を配るとよい。身体に良いことをすることで、気持ちが癒されることもある。普段から身体に良いことをする習慣を身につけておくことは、いざという時、ストレスからくるダメージを小さくする予防にもなるだろう。

また、研究という狭い世界に常に自分を閉じこめておくだけでなく、いろいろな自分の面を持って、研究と異なる世界にも根をはっておく、普段





の少々の努力も有効だ。日頃、他人のいろいろな経験や考えを聞いておくことも、いざ何か起きた時に役に立つ。先輩研究者の話の聞いたり、本を読むことでも追体験できるだろう。大地に根を何本もはってあれば、一本が切れても、他の根が幹を支えてくれる。大切なことは、ひとつが自分のすべてになってしまうのではなく、これがだめでもこっちもあるという複数のカードやチャンネルを持っておくことだと思う。

そしてさらなる新しいハラスメントを自分に寄せ付けないためには、怒るべきときにはきちんと怒り(自分は望んでいないこと、不快であることをはっきり伝え)、きちんと自己主張をすることも必要である。

### 女性研究者の研究環境をよくするために

ここからは、少し視点を広げて、マイノリティの研究者、特に女性研究者の未来について個人的に考えてきたことを述べたい。

日本で女性研究者の環境改善が叫ばれるようになってから、もう30年近くも経っている。

当面の課題は、まず女性研究者の割合を大きくすることである。社会のなかのマイノリティが15%を超えると、マイノリティの意見が、その社会に反映させられ始めるという。15%というのは心理学的に確立された数字である。国立大学協会は2010年までに女性教員の割合を20%とすること、日本学術会議や文部科学省の懇談会は将来的に30%以上とすることを目標に掲げているが、現実にはまだほど遠い。国際的に見ても遥かに低いうえに、ただ女性の割合が増えるだけでは問題の解決は困難なのだ。真の解決のためには、今は圧倒的に数が少ない助教授以上の女性管理職・女性リーダーが増えて初めて意味がある。

そのためのポイントが3つあると思う。第1に、行政上の支援である。上述の女性研究者の増員は、単なる努力目標であり罰則規定はない。罰則までとはいかずとも、各大学のトップホームページで男女教員の割合を、ポジション別に情報公開することが義務づけられるぐらいのことがなされないと、日本の状況は遅々として変わらないだ

ろうと思われる。米国の大学では、ホームページにあるUNIVERSITY FACTSに、ほとんど必ず、ファカルティー・メンバーの女性教員の割合を見つけることができる。第2に、女性研究者側の意識の問題だ。自分の所属する組織やグループで、きちんと自分の役割を果たしているか、今一度、考えてみる必要があると思う。そして第3に、男性研究者は、相手が男性だったら、または娘や孫のような自分と関係の深い人間だったらと想像し、包容力を持って同じ研究社会にいる女性たちに臨んでもらえないだろうか。マイノリティ(=たいていは立場的に弱者)が生きやすい環境は、長い目で見て男性研究者全体にとっても生きやすい研究環境になるはずである。

### 女性は女性により寛大に

今の研究社会のなかでは女性は女性により寛大に、とある女性の国立大教授が話しておられたが、まったく同感である。私が思うには、マイノリティのなかで言い争ったり喧嘩したりする姿は、マジョリティの側からみると「イタイ」ものだ。マジョリティは、既にマジョリティだけで社会ができており、マイノリティがいなくても特に困らない。マイノリティ同士で争っている姿を見たら、近づかないでおこう、と思う。女性研究者という観点からいうと、マジョリティである男性の前にしろ背後にしろ、女性が同性を批判することが、女性研究者(全体)の立場をさらに苦しくすることがあるのではないか。もちろん、基本的には個々のケースごとに判断しなければならないが、スタッフとして職を得ている女性研究者はすべて、特に自分より弱輩の女性研究者への対応には注意を要すると感じる。高い職位にいる女性ほど発言の影響は大きいのでなおさらだ。

結局、突き詰めて考えると、研究社会に女性のリーダーを増やせるかどうか、大きな鍵を握っていると思う。研究上の業績があるのはもちろん、バランスのとれた正しい価値判断ができる女性リーダーが数多くでてくることが必要だ。





## 日本の女性研究リーダーは増えるのか

日本では指導的立場にいる女性研究者が圧倒的に少ない。これは研究者全体に対して女性が占める割合の低さを考慮しても更に低い比率だ。

研究室を主宰したいと思う理系の女性研究者が、日本はアジア・オセアニア諸国のなかでも極端に少ないというアンケート報告がある。現在、指導的立場にいる女性の数が少ない上に、科学技術分野全体で男女の処遇に差があるという統計的な現実が、日本の女性研究者の前には立ちはだかっている。「望みがないから、望まなくなる」というのが分析した学者の回答だった。確かにそうだろうと思う。他のアジア・オセアニア諸国は、日本に比べて科学技術において後進国であるにもかかわらず、女性研究者の割合や、男女を問わない研究者のアグレッシブさという点でも、どうも日本を凌駕しているようだ。日本で本当に女性のリーダーが多くなる日が来るだろうか。

## アカデミック世界でのハラスメント対策

女性研究者の研究環境をよくすることに関しては、きちんとしたキャンパスセクハラ・アカハラ対策がなされることが前提となることは、今さら言うまでもない。それは女性リーダーを増やすことにもつながっていく。

10年前と比べて、研究社会におけるセクハラ・アカハラ事件や不祥事が、新聞やインターネットで報道されることが多くなった。まだ今のところは、被害者は男性より女性が圧倒的に多い。女性の学生や若手研究者が少しずつでも増加しているのに加えて、セクハラ相談窓口の設置が義務づけられたことも後押しし、被害にあっても泣き寝入りしない女性がいろいろなレベルで増えたことの表れだろう。

しかし、企業でも大学でも、相談窓口となっているコンプライアンス委員会がうまく機能していないことのほうが多い。ハラスメント対策の専門家がほとんど不在のため、重大な問題ほど研究組織だけでは対応が手に余る。結果として、問題を隠蔽しようとする組織の体質や、情報漏洩、さら

には調査委員の不用意・不適切な発言などで、本来救済されるべき被害者を余計に傷つけるといった構造的な問題が、どこの大学・研究機関でも起きているようである。

私は、組織外部に相談窓口を設けることを提案したい。農林水産省が全農(全国農業協同組合連合会)に対して、内部告発システムの設置を農協外部に設けることを命令した前例がある。これを報道した2004年11月15日号の『アエラ』の記事によれば、農林水産省課長曰く「内部告発する場合は全農内でなく外部の弁護士事務所などにする。全農にはそこと契約を結ばせ、内部告発者の名前はいつさい、弁護士事務所などから全農に通報させないようにする。そうしないと、職員や取引先は告発できない」。実際に、大学法人でもセクハラ・アカハラ相談窓口を弁護士事務所や民間の専門会社に外部委託しているところが、既にでてきている。

## さいごに

執筆の過程で、この連載企画が終わると聞き及び、非常に残念に思っている。この連載を読み、人知れず共感したり、勇気づけられたり、そのうち自分も書こうと心に秘めていた人達がいたことだろう。セクハラ・アカハラの被害当事者が、本当に苦しんでいる時にも、また傷が癒されつつある段階でも、それを書けないこと、或いは、二番目に心を苦しめている問題は言えても一番苦しんでいる問題は口にできないといった状況が、実感としてわかるからだ。もう二度とあの苦しい思いを繰り返したくはないが、しかしそれらを乗り越えたことで、私は人間としても研究者としてもプラスになったと考えられるようになった。自分で言うのも変かもしれないが、その時々七転八倒しながらも、自ら主体的に行動する勇気を持ったことで、困難を幸運に結びつけていくことができたのではないか。私の経験が、今つらい思いをしている方々に少しでもお役に立てば幸いである。最後に、理系の女性にとっては社会の流れがよい方に向きつつあるので、それぞれが勇気を持てば現状を変えていけるのではないかと思っている。

